

## 【FD 報告】

# 「国際共修グループワーク」のための Can do を考える

金丸 巧

本稿は、2023年7月5日（水）に実施された山梨学院大学グローバルラーニングセンター国際共修セッションによるセンター教員対象FD研修会についての報告である。本研修では、国際共修場面におけるグループワークの指導方法と評価方法をテーマとし、具体的には、「国際共修グループワーク Can do」を検討した。研修会を通して、日々、各教員が実践の中で感じている授業内の課題やその改善に向けたアイデアを共有し、整理することができた。そして、グローバルラーニングセンターとして国際共修グループワークをどのような機会と捉え、その中で必要な力をいかに育んでいくかという課題の解決に向けて重要な一歩になった。

キーワード：国際共修，目的に応じた意思疎通，グループワーク，Can do

## 1. 本FD研修の背景と目的

2023年度、山梨学院大学グローバルラーニングセンター（以下、GLC）FD研修会の共通テーマは、①各セッションの課題解決に向けた内容であること、②その課題がGLC全体の課題でもあること、であった。

この共通テーマを国際共修セッションの文脈で捉えると、本学の国際共修科目における課題の一つとして、授業活動内で行われるグループワークの指導と評価のあり方が十分に議論されてこなかったという点があげられる。GLCの教育目標は、「多様な背景を持つ人たちと、母語や母語以外の言語で、目的に応じた意思疎通ができる」ことであり、こうした力を実践的に身に付けるうえで、国際共修場面でのグループワーク（以下、国際共修GW）は重要な教育的意義がある。そして、どのような段階を経て、どのような基準で「目的に応じた意思疎通ができる」力に結びつけていくのかという国際共修GWの評価基準について教員間で議論を深め、それをCan doの形で整理することによって、教員と学生双方にとってグループワークの目標が明確になり、学習効果の高まりも期待できるだろう。また、このような国際共修GWに関する課題をGLC全体で捉えようとする試みは、各語学科目（日本語・英語・中国語）で育成すべき言語能力やコミュニケーションスキルの議論とも密接に関連するものであり、国際共修と語学教育の相乗的且つ相互補完的な教育を目指すGLCにおいて重要な課題であると考えた。以上のことから、本FD研修の目的を以下のように設定した。

目的：国際共修GWの指導方法と評価方法を考えるためのきっかけとして、「国際共修グループワーク Can do」を検討する

## 「国際共修グループワーク」のための Can do を考える

### 2. FD研修の内容

本FD研修には、GLC教員全14名の内、筆者を含む9名の教員が参加した（残り5名の教員は、授業のため欠席）。9名の教員の内、語学科目を担当する教員が2名、国際共修科目を担当する教員が1名、語学科目と国際共修科目の両方を担当する教員が6名であった。ここからは、研修会の具体的な内容を報告していきたい。

#### 2.1. 国際共修GWの事例紹介

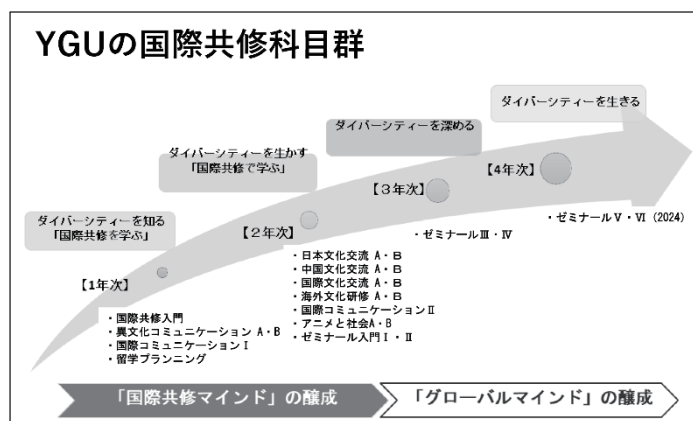


図1 YGUの国際共修科目群（研修時のスライドより）

国際共修GWについて議論を進める前に、本学における国際共修科目群の確認を行った（図1参照）。まず、1年次から4年次に含まれる科目をそれぞれ概観した後、今年度より新設された科目である「アニメと社会A・B」や「国際コミュニケーションII」、「ゼミナール」の説明を行った。そして、本学における国際共修プログラムの全体的な建付について改めて共通理解を持つ機会とした。

また、これらの科目の中で行われているペア／グループワークについて、2つの科目の事例を紹介した。1つ目は、国際共修科目の入門的な位置づけにある「国際共修入門」の事例であり、チームを作り、プロジェクトを進めていく活動や、毎回異なるクラスメイトとコミュニケーションタスクに取り組む活動を紹介した。2つ目は、発展科目である「アニメと社会A」の事例であり、日本人学生と留学生がペアを作り、テーマに基づいてアニメ作品を分析しながら、協働的にポスターを作成するという活動を紹介した。

#### 2.2. ワーク②：良いグループワークとは

次に、アイスブレイクとしてワーク②を行った。そもそも「良いグループワーク」とは何かについて各教員がどのようなイメージを持っているのか、キーワードをあげてもらった。

その結果、大きく3つの観点が出された。1つ目は、「態度」に関するものである。例えば、「テーマに興味を持って参加する」や「コミュニケーションに対する意欲が高い」等が出された。2つ目は、「パフォーマンス」に関するものである。こちらは、「意味交渉が起こる」や「役割がはっきりしている」等グループワーク参加者の行動に着目したキーワードがあげられた。3つ目は、「内容」に関するものである。具体的には、「新たな発見、展開がある」であった。それぞれの教員が担当する科目の状況は異なるが、GLCとしてどのようなグループワークのあり方を目指していくのかを考える上で、相互のイメージを共有できる機会となった。

#### 2.3. ワーク③：国際共修GWのためのCan do

次に、ワーク③では、2つのグループに分かれ、国際共修GWのためのCan doについて議論を進めてもらった。その際、特に、留学生のグループワーク参加に関する視点として、2022

年度にGLCにて刊行された『国際共修のための語学教育Can-do2021』（山梨学院大学グローバルラーニングセンター「YGU全学横断型Can-doプロジェクト」ワーキンググループ編2022）も参照してもらうこととした。こうすることで、これまでGLC内で検討されてきた内容を踏まえ、発展的な議論が可能になるのではないかと期待した（図2参照）。

**ワーク①**

ワーク①の結果を踏まえ・・・

- 「国際共修GW」のためのCan do

参照：『国際共修のための語学教育 Can-do2021』  
「この授業に参加するために必要な行動を、留学生の視点から、やりとりの方向性（一方向的か、双方向的か）、観察可能な形で従事している行動（聞く、話す）のマトリックスで整理し、活動領域ごとに「説明・指示の理解」「発表」「ペアワーク・グループワーク」とした。」（p.11）

図2 ワーク①説明（研修時のスライドより）

ワーク①の話し合いは、各教員が、日頃接している学生の様子を紹介しながら議論が進んだ。その結果、異なる背景を持つ学生同士がグループワークを進める上で必要なCan doとして、1) 受け入れる姿勢、2) 言語調整能力、3) 言語以外の側面への着目という3点が出された。

まず、1) 「受け入れる姿勢」については、「心を開く」や「相手を受け入れる」「興味を持つ」といったキーワードが出された。国際共修場面において、異なる背景を持つ学生同士が興味や関心を持ち合うことで、お互いの理解を深め、それが友人関係の形成につながる。そのような友人関係が基盤となることで、グループワークが単なる作業ではなく、関心を持つ者同士の発見や喜びにつながる主体的な行為へと変わっていく可能性が期待できるだろう。

次に、2) 「言語調整能力」については、「言語ホスト（言語能力が高い人）が言語ゲストに配慮した話し方ができる」「相手に合わせて調整することができる」といった意見が出された。友人関係が形成されたとしても、伝えたいことがしっかり伝わらなければ、「目的に応じた意思疎通」につなげることは難しい。その意味では、例えば、日本人学生が「やさしい日本語」を用いてコミュニケーションを取ろうとする姿勢を身に付けることは必須の能力だといえる。

最後に、3) 「言語以外の側面への着目」については、「言語以外のアウトプット（パワーポイントやポスター等）」が例としてあげられた。グループワークでは、その場のやりとりへの参加の仕方（態度やパフォーマンス等）に着目しがちであるが、それ以外の側面での貢献も重要な観点である。

最後に、3) 「言語以外の側面への着目」については、「言語以外のアウトプット（パワーポイントやポスター等）」が例としてあげられた。グループワークでは、その場のやりとりへの参加の仕方（態度やパフォーマンス等）に着目しがちであるが、それ以外の側面での貢献も重要な観点である。

#### 2.4. ワーク②：ワーク①を踏まえた留学生への学修支援とは

最後に、ワーク①で出されたCan doを留学生が身に付けることができるように、授業内でできる学修支援についてアイデアを出してもらった。その結果、活動デザインの工夫や、ペア／グループ編成の工夫、学生同士の関係性構築を促す工夫等が出された。また、留学生に対して「全てが分からなくても、例えばまずは50%分かればよい」といったアドバイスをすることで、参加しやすさを支えるといった意見も出された。留学生にとっては、日本語の壁によってグループワークに十分に参加できない場合もある。また、参加できたとしても、その中で自分の意見を的確に伝え、新たな知識や価値を創出していけるような十全的な参加が難しい場合も多い。ワーク②で出されたアイデアや工夫の一つひとつが、留学生にとって参加しやすい国際共修GWを設計する上で重要な観点だといえる。また、こうしたアイデアや工夫を通して、国

## 「国際共修グループワーク」のための Can do を考える

国際共修科目の担当教員が留学生に関わっていく姿は、同じ教室でともに学んでいる日本人学生にとっても関わり方の模範となり得るだろう。

### 3. 研修会のまとめと今後に向けて

以上が、2023年度国際共修セッションが実施したFD研修会の報告である。本研修会の目的は、国際共修GWの指導方法と評価方法を考えるためのきっかけとして「国際共修グループワークCan do」を検討することであった。今回、日々、各教員が実践の中で感じている授業内の課題やその改善に向けたアイデアを共有し、Can doの形でいくつかを整理することができた。そして、GLCとして国際共修GWをどのような機会と捉え、その中で必要な力をいかに育ていくかという課題の解決に向けて重要な一歩になったといえる。

一方で、今回の研修会では時間の都合上、各語学科目の立場から、どのようなスキルを想定し、学生に身に付けていってもらおうかという点までは議論が至らなかった。この点については今後の課題としたい。なぜなら、より良い国際共修GWを実現するには、国際共修科目における実践的な指導と、各語学科目における自己表現、他者理解を支える言語能力やコミュニケーションスキルの醸成の双方向の働きかけが必要だからである。

全学国際化を進める本学において、「国際共修」とは、全ての学生のキャンパスライフにおいて重要なキーワードとなるだろう。その意味でも、本FD研修で出されたCan do項目を出発点として、GLCが目指す国際共修GWのあり方を引き続き検討し、山梨学院大学の学生の正課内外における国際的な経験と学びを支えていきたい。

#### 参考文献

山梨学院大学グローバルラーニングセンター「YGU 全学横断型 Can-do プロジェクト」ワーキンググループ (2022). 国際共修のための語学教育：アカデミックな場面への参加を可能にする日本語授業のCan-doリスト2021 <https://www.ygu.ac.jp/glc/publication/candolist2021> (2023年10月31日)

KANEMARU Takumi